

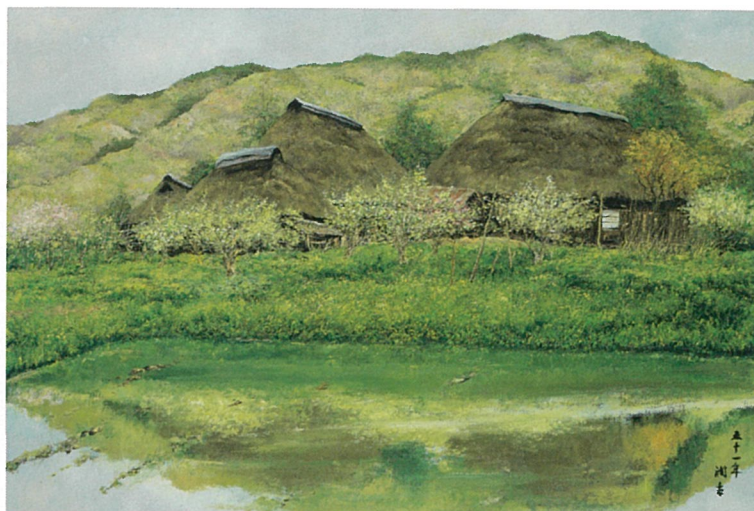
向井潤吉が愛でた季節

早春の武蔵野と遅春の東北

4月1日(日) - 7月22日(日)



《早春の水路》1981(昭和56)年



《春映》1976(昭和51)年

「ことに早春から芽吹くころにかけての美しさは、

武蔵野らしい風趣がおいおい消滅して行く折から、

天下の絶景と推賞してもいいほどに、凜としたながめである。」

(朝日新聞 1965年3月12日)

「半年間、豪雪の中に埋もれていた家々は、

五月になると一斉に春と夏を迎えたように、

人も、山も草木も生き返って活気づく。」

(『日本の民家』保育社 1979年)

立春が過ぎると、陽の光、草木の色、風の薫りに近づく春の気配を感じ、気持ちも和らぎ心も浮き立ちます。生命が輝き出す季節の到来を、人々は待ちわび、そして喜びをもって迎えてきました。南北に伸びる日本は、春はゆっくりと北上しながら訪れ、それぞれの地域を色づけていきます。南に梅が咲き始めた2月初旬のころ、東北ではまだ深い雪に覆われた景色があるように、春の迎えかたは地域によって様々です。

向井潤吉の春を題材にした民家作品を通じて、その足取りを辿ってみると、東京近郊から埼玉県にまたがる武蔵野の一带、そして岩手県や山形県など東北地方へは、足繁く訪れています。

梅の花や新芽が吹く2月ころ、埼玉県の東松山、毛呂山、寄居などの武蔵野の面影が残る叢林にキャンバスをたずさえ何度も赴いています。静かにしのび寄る春の訪れに心傾けて、冬から春へうつろう季節の情景を美しく写し取っています。わずかな春のきざしも見逃さずに捉えた作品には、私たちに春を迎える喜びを改めて感じさせてくれます。

また5月になると、長く雪に閉ざされた厳しい冬から一斉に春を迎える東北へ足を向けます。風景に新緑が活気を与え、瑞々しい鮮やかな情景を、生彩豊かに表現しています。伸びやかに輝きを増す草木、まばゆい光を吸い込む民家の草屋根、生命を抱き育む山並みなど、春を謳歌する自然の姿を、多種多様な色彩を巧みに混ぜ合わせながら、卓越した筆致によって、春の風景を臨場感豊かに創出しています。

武蔵野と東北、この二つの異なった地に訪れる春に、向井潤吉はそれぞれの風趣を感じ取っていったように思います。武蔵野の早春の情景には、訪れる春のささやかなきざしを感じ取り、冬の面影を残しながらも春への予感を漂わせています。また、東北においては数歩遅れてやってきた春の光に満ち溢れた輝かしい情景の広がりを表しています。向井潤吉は、それぞれの土地を訪れ、それぞれの地が迎える春を体感し、土地に住まう人々と共感するかのよう、春を慈しむまなざしを風景に向けたのでしょう。

本展では、早春の武蔵野と、春遅い東北に取材した作品をご紹介します。向井潤吉が愛でたそれぞれの土地の輝きに満ちた春の姿を見つめ、吟味いただきたいと思います。